



©大阪大学+青年団

画したとあれば、人間らしさを演出するための技術的・行動科学的な研究成果発表としての出し物に違いないと予想された方も多くおられるだろう。しかし『森の奥』は、人間に極めて近い社会性を持つ類人猿・ボノボを引合いにして、人間とそれ以外の生物はどういった基準で異なるか、と言えるのか、その問いをかける存在としてのロボットが強い存在感を持ったものであり、演劇型哲学カフェとも言える試みだったのである。

これには観客も考える主体として関わっていかざるをえず、会話の内容はどれも考察の手がかりとなるものばかりであった。人間と類人猿を分ける、あるいは分け難くしている科学的な実証や、かつて人類を観察対象として展示した万博の事例、研究者たちの私的な体験談などが矢継ぎ早に語られ、さらには、2030年においてもまだ飢餓問題が解決されていないこと、年代や職業ごとに異なる「ロボット」という概念の問い直しなど話題が尽きることはなく、観客によって実に千差万別の思考経路が築かれたことだろう。一つのトピックにつき必ず一冊の専門書を読み込んでからシナリオの作成に向かうという平田氏と、人間存在への問い(『阪大NL vol.7』参照)を熟成させる石黒氏ならではの問いかけの数々は、文化人類学・医学・哲学・社会科学などそれぞれの専門家からすればどれもよく聞く話、かも知れない。しかしそれがひとつところに集められ、ロボットという第三者によって人間本位の視線をリセットされるのが一番の見所だと筆者には思われた。そのため、登場する二体のワカマルは「ワタシハ、ニンゲンダ。」などというロボットものにありがちなフレーズは決して口にしない。どれだけ人間に詰め寄られても、あくまでもロボットであろうとし、ロボットとしての立場からしか語ろうとしないのである。

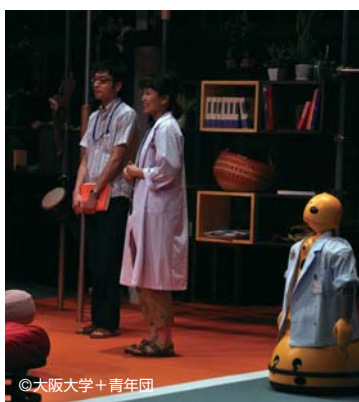
それでは、演劇へのロボットの介入によって私たちが期待させられるセンチメンタルなドラマ性が全く描かれていないかというところではない。たとえば物語の終盤、誰も居なくなった研究室に残ったワカマルが、同じくワカマルである同僚をつかまえて、「私たちは、歌を唄える?」と問いかける。「歌なら、沢山知っているじゃないか。」と返す同僚に、「ゴリラは、鼻歌が唄えるらしい。私は、鼻歌が唄いたい。」と言いつつむように(或いは夢見るように)見えるシーンである。

劇中のワカマルは、人間に限りなく近い類人猿達が未だ獲得しない言語を手に入れている。しかし対象者の居ない自発的な行動を起こすことは出来ない



©大阪大学+青年団

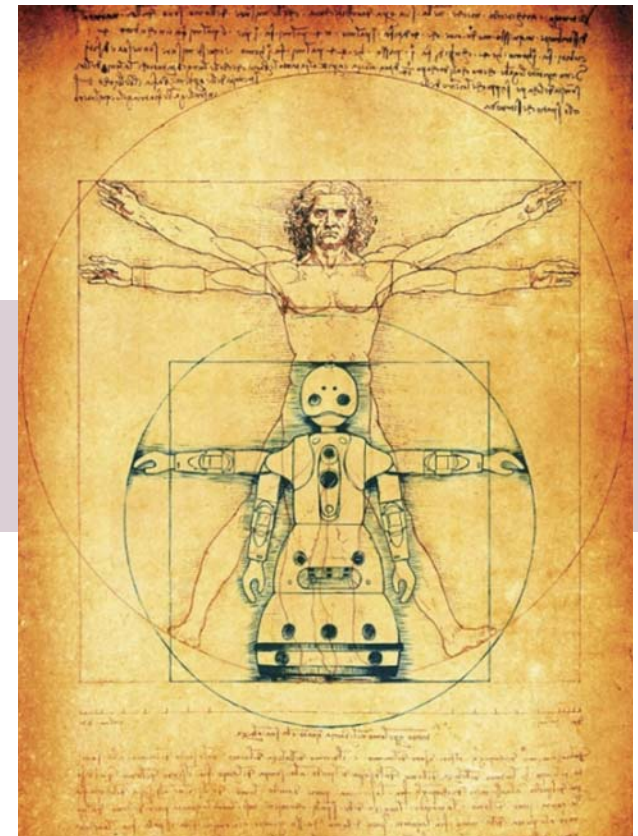
ない、と嘆くのである。ワカマルが何かを望むというこれまでと違った展開に、会場の空気は一気に緊張し、しんと静まり返った(実際この時、筆者にも初めてワカマルの顔に哀しみに似たものが感じられた)。舞台は、この眩きによってロボットと生き物はいかに異なるのかという次の議論へ移っていくような気配を見せるが、しかしどうやら今回の物語はここで一度終止符をうつようである。ワカマルがプログラム通りのゆつくりとした動きで舞台から降りていくと、どこか安堵したため息があちこちでもれたようであった。



©大阪大学+青年団

- (※1) 株式会社イーガー 取締役会長・黒木一成氏。ワカマルのプログラミング開発のために前作から携わっている。
- (※2) 『働く私』 2008年に大阪大学イ号館・21世紀懐徳堂で初演された、一組の夫婦と二体のロボットの4役での会話劇。公演時間は20分程度だった。『森の奥』は90分近い。
- (※3) 『R.U.R.(Rossum's Universal Robots)』 カレル・チャペック著。
- (※4) 劇中ではたとえば、DNA配列だけを見れば人間とボノボでは1%未満の違いしかないことなどが語られる。
- (※5) 1889年のパリ万博。また、1903年に大阪で開かれた第5回内国勧業博覧会では、アイヌを始めとする少数民族を区域内に住まわせて、彼らの日常生活を展示した。

●あいちトリエンナーレ ロボット演劇『森の奥』観劇記



Robot 'wakamaru' design : Toshiyuki Kita / Artwork : Norio Kudo

私は猿になりたい? ～ヒトと猿とロボットと、 未来を考える鑑賞型哲学カフェ～

● 文学研究科博士前期課程文化動態論専攻アート・メディア論コース
西尾真由子——Mayuko Nishio

世界中のパフォーミングアーツを集結するあいちトリエンナーレのオープニングを飾ったのは、ロボット演劇と銘打たれた鑑賞型哲学カフェであった。演劇を機械的に構成する平田オリザのメソッドと、石黒浩が考える“人間らしさ”を導く手法は、“間”を追究することで合致し、90分近くの大作となって学外へと飛び出していった。

ロボット演劇『森の奥』は、2030年代のアフリカ・ジャングルにある類人猿研究所を舞台とした、主人公の存在しない会話劇である。研究所に所属する学者たちに加え、自閉症の息子のために類人猿の脳実験を希望する心理学者、類人猿特有の性交現場をテーマパークの出し物にしようとする業者、また、二体のロボット・ワカマルも白衣を着た研究者の一員として議論に加わる。

ワカマルには台詞や動きを含むひとままとりのシーンをいくつも記憶する機能が備わっており、遠隔からのスッチングでスタートすると、その後は楽譜をなぞるように時間軸に沿って稼働する。掛け合いはほぼ自動的に進められ、台詞のタイミング等は俳優がきっちり覚えて合わせてくる。そしてこれらのシーンを構成するひとつひとつの「間」が、なんと100分の1秒の細かさで平田氏によって指示されたというから驚きである。平田・石黒両名がこれまでに考察を重ねて来た会

話が成立していると感じさせる条件を抽出し、黒木氏が忠実にロボットへとプログラミングするという、気の遠くなるような作業の積み重ねで前作の3〜4倍もの長さの演劇が作られたのである。コードも引かず動き回るワカマルと俳優は互いに語り合うが、その会話のどのよう仕組みで成り立っているのかは一目では判別できず、あえて説明もされない。実際、観劇終了後に観客に尋ねたとすれば、動きのトリックについて様々に異なった見解が

語られたことだろう。舞台にヒト型ロボットという役回り登場させる演劇は、1921年に発表されたチェコの戯曲『R.U.R.』以来、数多く試みられている。作業機械としてのロボットが登場する場合と異なり、ヒト型は人間の感情や行動パターンを模倣するアンドロイドとして用いられることが多く、演出家の要求が過ぎれば人間が精巧な着ぐるみを着てその役を演じることも珍しくない。よって、大阪大学がロボット演劇を企